

寿命が延びる 医者・病院の選び方

熱がないとわかると、その当番医は興味を失つたようだ。それでも島内さんの苦しさは増すばかり。「なんとかしてください」と食い下がる、「とりあえずCT(コンピュータ断層撮影)を撮りましょう」と検査室に回された。

「検査の結果、胆のうに異変があることが判明しました。血液検査もして、炎症があることもわかった。医者が下した診断は『胆のう炎』でした。

病名がついたので、なんらかの処置をしてくれるのかと期待していたら、「たいしたことはないと思いますので、大丈夫ですよ。今日のところは帰つてください」と言われた。こちらは息をするのもやつとという状況なのに、痛み止めのカロナールを処方されただけで帰らされました」

帰宅して薬を飲んだが、痛みは一向に治まらない。結局、夜も一睡もできな

いままに次の日を迎えた。「昨日の医者はもういないかもしませんが、同じ病院に行くのはもうごめんだと思って、中央区にある有名病院にかけこみました」

そこで改めて検査を受けたところ、担当の医者の表情が明らかに変わった。「すぐに手術になります」

昨日の病院では、ただの胆のう炎と言われたと説明すると、「違いますね。これは胆のう壊疽です。胆のう炎が悪化して、すでに腐りかけている状態です。緊急手術が必要です」と言われた。

「スケジュールを調整して、それでも難しい場合に行なう全脳照射を最初に行つてしまつたのだ。

手術後は傷口に痛みはありません。血のう病は標準治療ではな

ども、その後で癌細胞が見られたため、検査会社は「肛門から生検した」と記載してしまつたのだ。

検体には、肛門に存在しないはずの細胞が見られたため、検査会社は「肛門の粘液腺がん」と診断した。

でもらい、なんとか手術を行うことができました。それほど急を要する状態だったのでしよう。

手術後は傷口に痛みはありませんが、あの縮め付けられるような痛みから解放され、晴れ晴れとした気持ちでした。担当

医に「昨日の病院では誤診されたんですね」と尋ねると、同業者の悪口を

言いくらいのか、笑つてごまかされました」

休日勤務の若い当番医で、胆のうに関する知識が根本的に不足していたのかもしれない。運が悪かつたとはい、このよ

うな誤診は往々にして起

こりうるのだ。

「主治医はその病院で大きな力を握っている放射

線医でした。どのような形で治療方針が決まつたのか……。いまだにやりきれない気持ちです」(石田さん)

他にもよく起るのが

「伝達ミス」だ。医療事

故を扱う弁護士・石黒麻

利子氏が語る。

「自治体の大腸がん検診

で陽性となつた60代女性

のケースです。病院で精

密検査を受けたのですが

特に異常は見られず、直

腸下部にわずかな炎症が

ある程度でした。病院の

医師は念のため、直腸の

炎症部の細胞を検査会社

に回した。ここでミスが起きました

病院の医師が病理検査依頼書に誤って、本来書くべき「直腸」ではなく「肛門から生検した」と記載してしまつたのだ。

検体には、肛門に存在しないはずの細胞が見られたため、検査会社は「肛門の粘液腺がん」と診断した。

本来であれば、ここで医者がおかしいと気づき、再度精密検査をするべきだったが、がんといふ思い込みが重なつて、結局女性には進行性の「肛門直腸がん」という診断が下される。ちょっとした伝達ミスから生じた大きな誤診だった。

「この女性は、実際にはがんではありませんでした。しかし人工肛門を造設されてしまったのです」

上氏は、大学病院を「縦合百貨店」に例える。

「大学病院は組織の性格

上、すべての科の看板を下ろすわけにはいかない。

(石黒氏)さらに信じがたいことに、手術の現場では「手術部位の取り違え」も起

た。

「この女性は、実際にはがんではありませんでした。しかし人工肛門を造設されてしまったのです」

上氏は、大学病院を「縦合百貨店」に例える。

「大学病院は組織の性格

上、すべての科の看板を下ろすわけにはいかない。

(石黒氏)さらに信じがたいことに、手術の現場では「手

術部位の取り違え」も起

た。